

〈鳥海山麓だより 8〉

やっけ

鈴木京子

「冬がなければと思うでしょ？」

東京の友人らによくそう聞かれる。私の答えは「ヤアダア！ 冬がなかったら一年中働いてなきやならないんだよ！」だ。

クリスマスをはさんでの一週間、ミネコさんちで葉牡丹の出荷作業を手伝ったら、あとは二月末まで「冬眠」だ。この冬眠期間があるからこそ、春夏秋冬を、太陽と大地に感謝しながらだを使つて働いて暮らせるのだと思う。

刺し子教室に「復学」し、映画のDVDを一日中見て、読みたかった本を片っ端から片付ける。通年週一回の刺し子教室では、同期生はとくに修了証をもらい、私は留年三回。でも、農家仕事のない冬に刺す、これこそが伝統的な刺し子ライフなのサ。

冬眠期間中の稼ぎは、時給七七〇円のお風呂掃除だけになる。週四日、夜の八時半から三時間、

雪の中を近くの温泉施設に通つて、宴会場の片付けをし、サウナや浴槽を亀の子タワシでゴシゴシ洗う。やつと月四万円弱の収入を得る。それでも、ゼロになるよりはいいヨネ。夜の仕事だから農家仕事がある季節もできる。始めてからもう二年が経った。

十二月の始めごろ、お風呂掃除歴十年以上のムッチャンが、パート仲間全員に、古米を、申し訳なさそうに、でもかなり強引に配った。

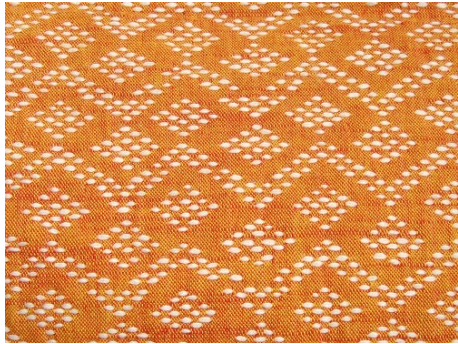
「新米も出て、もつけどども（申し訳ないけれど）手伝つてくれえ」

近所の農家さんから三〇キロ袋をもらい困っているのだとか。ムッチャンの娘も農家だし、ほかのパートさんたちも自分あるいは親戚の誰かがコメをつくっている。このあたりでは、余つて困っている人はいても、「コメがなくて困っている人」はごく稀だ。

年が明けてからもまだ、ムッチャンは「コメ、いらねが？」と騒いでいるので、コメを必要としている人を紹介した。野宿者に炊き出し支援をしている仙台のグループだ。「送料は送る人の負担になるけど、余っているなら……」と、恐る恐る言ってみた。即答だった。「おらあ、やっけだあ（面倒くさい）」。

「ああいう人もやあ、仕事も家もねぐているんだば、わがまま言つてねで、田舎に帰つてくれればええんだよのお。田舎だば、食えねつてことはねえ」

ハナチャンがそう言うと、その場にいた四人はみな同感のようだった。



刺し子 2014 シーズンの新作！
刺し子部分には会津木綿を使い、色味は緑、紫、黄（インド綿）を全体に生かしました。マチ部と肩ベルトの、共通の刺し子もいいでしょ？



これは3年前に作ったメンダリ（前掛け）。リバーシブルで裏はかわいい拵です

本当にそうかな？ 田舎なら生きられるかな？

もちろん帰る田舎なんかない人もいるし、田舎がある人だって、もしかしたら都会で衣食住に困る以上の、「どうしようもない生き難さ」に曝されることをわかっているから、帰らないのじゃないだろうか。私は実家を出てからずっと、いつホームレスになるかわからないと覚悟しながら生きているけど、ホームレスになったら、きっとここにはいられない。田舎は、人も環境も、ホームレスという生き方を許さない。

都会には、ホームレスとして生きられる多くの無関心と、ほんのちよつとの手助けがある。そして、その無関心という「自由」のほうが、田舎の「どうしようもない生き難さ」よりもマシ、と思う人が確かにいるのだと私は思うよ。